

JOC / JWGA / JADA / NRAJ 加盟団体

日本フライングディスク協会 公式ガイドブック

～IOC公認競技11種目の概要～



《加盟団体》

(公財)日本オリンピック委員会 / (特非)日本ワールドゲームズ協会
(公財)日本アンチ・ドーピング機構 / (公財)日本レクリエーション協会



一般社団法人日本フライングディスク協会
住所 〒144-0033 東京都大田区東糀谷6-4-8
TEL 03-6423-6801 FAX 03-4335-2381
Mail info@jfda.or.jp WEB www.jfda.or.jp

JAPAN FLYING DISC ASSOCIATION

アルティメット
ガッツ

ディスクゴルフ
フリースタイル

ダブル・ディスク・コート
ディスカソン
ディスタンス
アキュラシー

マキシマム・タイム・アロフト
スロー・ラン・アンド・キャッチ
ビーチアルティメット

JFDA公認ソフトディスク種目「ドッヂビー」



フライングディスクとは

フライングディスクの起源は、1940年代に、アメリカ合衆国コネチカット州にあるエール大学の学生が、キャンパス近くの「フリスビー・パイ」というパイ皿を投げて遊んだことが起源とされています。そして、その金属製パイ皿を投げて遊ぶ姿を見たウォルター・フレデリック・モリソンが、1948年にプラスティック製の安全なディスクを作ったのが始まりです。その後、製造・販売の権利をモリソンから取得したワーム・オー(WHAM-O)社が1959年に"Frissbee"の名称を登録商標として売り出したことから世界中に広りました。

初期の頃は玩具として使用されましたが、優れた飛行特性を活かした11種目が生み出され、プラスティック製ディスクと11種目を総称する一般名称「フライングディスク」が1984年に制定されました。材質や形状に改良が重ねられた現在のフライングディスクの飛行性能は、最長飛距離「263.2m」、最高時速「時速140km」、最長滞空時間「16.72秒」とギネスブックに認定されるほど優れたものとなっています。そして、世界フライングディスク連盟(WFDF)は、2015年8月2日にマレーシア・クアラルンプールで開催された第128次国際オリンピック委員会(IOC)総会において、2年間の準承認期間を経て正式に承認団体として認められました。フライングディスクは、2020年東京オリンピック追加競技の最終候補に残ることはできませんでしたが、2024年オリンピック競技になることをを目指し、更なる普及に努めています。

協会概要

一般社団法人日本フライングディスク協会 (Japan Flying Disc Association : 英略JFDA) は世界フライングディスク連盟に加盟している日本におけるフライングディスク競技11種目の統括団体で（日本ディスクゴルフ協会とは協力関係にあります）、各種大会開催、世界大会への選手派遣、記録・用具の公認、指導者の認定、講習会の開催、ルールの制定等の事業を実施しており、「IOC 承認の高度な競技スポーツ」として、また誰でも楽しめる「みんなのスポーツ・生涯スポーツ (Sports for All)」としても、フライングディスクの普及・振興に努力しています。現在、日本オリンピック委員会、日本アンチ・ドーピング機構、日本ワールドゲームズ協会、日本レクリエーション協会に加盟しています。

本協会は、1975年に初代会長、岩本勝也によって名古屋で創設された日本フリスビー協会を1983年に東京に本部を移転し、「フリスビー」が登録商標であることから世界連盟と共に1984年に現在の名称に改称した組織です。2代目会長は東海スポーツ社長（当時）瀬尾實、3代目会長は東和通商社長星山一郎が務め、東京に移転してからは、東京大学名誉教授江橋慎四郎が4代目会長を2001年8月まで務めました。その後、筑波大学名誉教授長谷川純三が5代目会長を2009年6月まで務めた後、現在6代目会長には世界フライングディスク連盟理事・スポーツアコード（国際スポーツ団体連合）前理事・国際ワールドゲームズ協会理事の師岡文男が就任しています。

2015年2月現在約4,000名の会員が加盟しており、インストラクター1級・2級・ディスクアドバイザー1級・2級・3級の5段階の指導者資格取得者も合計約200名に達しています。現在、44都道府県に都道府県協会が設立されており、学生のみならず、幅広い世代が会員登録をしています。

沿革

- 1969年 「フリスビー」が初めて日本に紹介される
- 1975年 日本フリスビー協会設立（名古屋市）
- 1976年 第1回全日本フリスビー選手権大会開催（以降、全種目の全日本選手権大会を毎年開催）
- 1984年 世界連盟の改名に準じて日本フライングディスク協会に名称変更
- 1992年 世界アルティメット&ガット選手権大会を栃木県宇都宮市で開催（NHK-BSで5時間の生中継 / アルティメット女子日本代表初優勝）
- 1996年 全日本アルティメット選手権大会優勝チームに文部大臣杯授与が許可される
- 2001年 ワールドゲームズ秋田大会正式種目として「アルティメット」「ディスクゴルフ」が採用される（アルティメット日本代表3位入賞）
- 2012年 「アルティメット」がゴール型の球技として中学校の学習指導要領に採用される
世界アルティメット&ガット選手権大会を大阪府堺市で開催（アルティメット女子日本代表が優勝）
- 2013年 世界フライングディスク連盟(WFDF)が国際オリンピック委員会(IOC)の準承認団体となる
- 2014年 日本フライングディスク協会の登記をNPO法人から一般社団法人へ変更
日本フライングディスク協会が日本オリンピック委員会(JOC)の加盟団体となる
- 2015年 世界フライングディスク連盟(WFDF)が国際オリンピック委員会(IOC)の承認団体となる

Ultimate

アルティメット

写真：WFDF2014世界アルティメットクラブチーム選手権大会 / イタリア・レッコ / 2014.8.2-8.9



競技映像

1968年に高校生のジョエル・シルバーが考案し、アメリカ合衆国ニュージャージー州メイプルウッド市のコロンビア高校で最初のゲームが行われた7人制のチームスポーツで、100m×37mのフィールドでフライングディスクを落とさずにパスをして運び、コート両端のエンドゾーン内でディスクをキャッチすれば得点となるスポーツです。

世界大会では17点先取の得点制で勝敗を決定します。他の球技にはないディスクの飛行特性を操る技術や走力、持久力を必要とすることから「究極(Ultimate)」の名前が付けられました。ディスクの特性を利用した「華麗なパスワーク」、風によって浮いているディスクを飛びつきながら掴む「ダイビングキャッチ」、コートの端まで届く「ロングスロー」などのダイナミックなプレーが魅力のスポーツです。

アルティメットは身体接触が禁止されており、フェアプレーを最重要視したセルフジャッジ制を導入していることが最大の特徴で、選手は競技者と審判の役割を同時に求められます。プレーに参加する選手はルールを熟知した上でプレーを進め、選手同士で意見の相違が発生した場合は自分の意見と相手の意見を考慮し、自分に有利／不利ではなく事実に忠実に判断をすることが求められます。

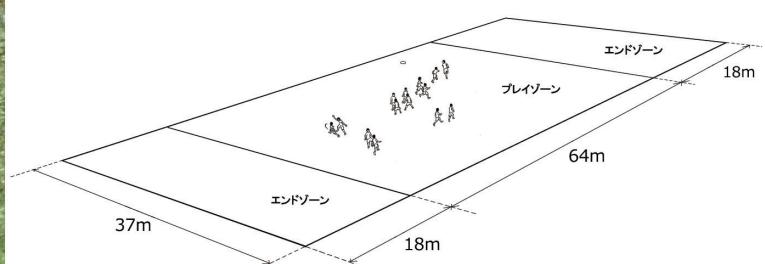
2012年には大阪・堺市で「世界アルティメット&ガッツ選手権大会」が開催され、ウィメン部門日本代表が優勝という結果を残しています。また、2012年度以降、中学校の学習指導要領にゴール型の球技として採用され、道具を操る能力や参加生徒全員の運動量確保、ルールとフェアプレー精神に従い自分たちで判断をして試合を進めるセルフジャッジなど数多くの観点から日本体育協会にも評価されています。

主な世界大会

- ワールドゲームズ（ミックス形式）
- 世界アルティメット&ガッツ選手権大会
- 世界アルティメットクラブチーム選手権大会
- 世界U-23アルティメット選手権大会(23歳以下)
- 世界ジュニアアルティメット選手権大会(19歳以下)
- 世界ビーチアルティメット選手権大会

主な国内大会

- 文部科学大臣杯全日本アルティメット選手権大会
- 全日本大学アルティメット選手権大会
- 全日本大学新人アルティメット選手権大会
- 全日本ミックスアルティメット選手権大会
- 全日本マスターズアルティメット選手権大会



Guts

ガツツ

写真：第40回全日本ガツツ選手権大会 / 神奈川・箱根 / 2014.6.21-6.22



ガツツは、1954年にアメリカのダートマス大学で考案された種目で、各5人ずつの2チームが14m離れた平行線上（女子は13m）に向かい合い、ディスクのスロー・キャッチを行います。オフェンステームの1人が、相手のライン上に並んでいるディフェンステムの5人に向けてディスクを投げ、ディフェンステムはそのディスクを片手でキャッチします。ディフェンステムのキャッチミスもしくはオフェンステムのスローミスによって、相手チームにポイントが与えられます。21ポイントを先取すれば1セット獲得となり、2セット先取の3セットマッチで試合が行われます。

ディフェンステムは、オフェンステムが投げたグッズローをディスクに身体の2ヶ所が同時に触れることなく片手でキャッチ（クリーンキャッチ）もしくは数人が触れた後、片手でキャッチ（フォローキャッチ）できなければオフェンステムの得点となります。ディフェンステムがクリーンキャッチをした場合はキャッチした選手が、オフェンステムの投げたスローがグッズローでなかった場合はディフェンステムの任意の選手がスローウーとなり、攻守交代をしてゲームを進めます。得点の合計が11点になる度にチェンジコート、1セット21点の3セットマッチで2セット先取をしたチームが勝者となります。

最もポピュラーながらパワフルな「バックハンドスロー」、コースや高さを狙うのに適した「サイドアームスロー」、親指をディスクの内側にあて、他の指で表面を握って投げる「サムフリップ」、ガツツ独特のテクニカルスローの「ピンチスロー」などスローウーの技術やパワーによって変化に富んだ多彩なスローが特徴です。

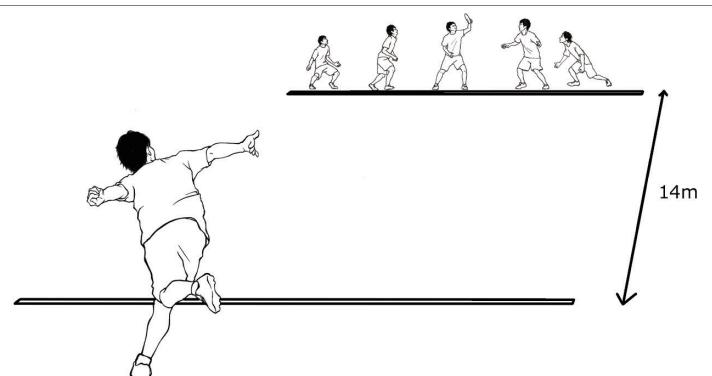
2012年に大阪・堺市で開催された「世界アルティメット＆ガツツ選手権大会」では、オープン部門日本代表が優勝という結果を残しており、日本が世界一を狙うことのできる種目です。

主な世界大会

世界アルティメット＆ガツツ選手権大会
アジア・オセアニアガツツ選手権大会
アジア・オセアニアガツツクラブチーム選手権大会

主な国内大会

全日本ガツツ選手権大会
ウィンターインドアガツツ選手権大会



ディスクゴルフ

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか 2014.8.22-8.24



競技映像

ディスクゴルフは、バスケット型のゴールが設置された通常18ホールのコースを回る種目です。ティーエリアからスローをし、バスケットにディスクを入れるまでの投数がそのホールのスコアとなり、全ホールの合計投数の少なさを競います。遠投力・ディスクコントロールだけでなく、コース取りの戦略や集中力など総合的な力が要求され、自己の勝利に加えて対戦相手や自然への尊敬の念を持ってプレーを進めます。

個々にディスクを持った4人1組のパーティーで各ホールを回ります。1投目はティーラインの後ろから投げ、2投目以降はディスクが止まった地点から投げます。この時、落下したディスクの前方をマーカーと呼ばれるミニディスクでマークし、ディスクをリリースするまではこのマーカーを超えてはいけません。自然の地形を活かした立木、ウォーターハザード等の障害に加え、マンダトリーと呼ばれるディスクの通過を義務づけた地点やコース外を示すアウト・オブ・バウンズなどを設け、難易度に応じてホール毎に規定投数（パー）を設定します。

競技としては、遠投力・コントロールなどディスクを扱う技術に加えてパット時の集中力などの精神的な技術も必要とされますが、自然環境に親しみながらグループでプレーを楽しむことができ、誰でも手軽に始められるため、生涯スポーツ・三世代スポーツとしても広く普及しています。

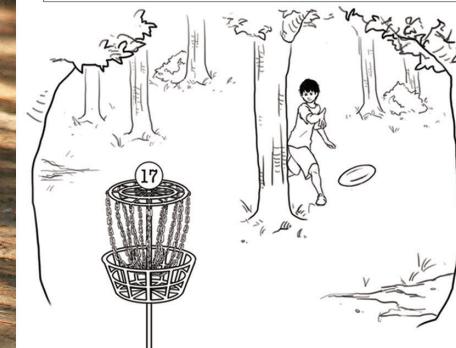
障害物をクリアするためにディスクを立てて投げ、地面を転がす「ローラー・スロー」、ディスクを裏返して投げることで目標に正確にアプローチする「アップサイドダウン・スロー」、地面にディスクを当てるこではずませる「スキップ・スロー」など、場面に応じて様々なスローを使い分けたり、飛行性能の異なる多様なディスクを使い分けることも面白さのひとつです。

主な世界大会

- WFDF世界ディスクゴルフ選手権大会
- PDGAアマチュア世界選手権大会
- PDGAプロ世界選手権大会

主な国内大会

- 全日本フライングディスク個人総合選手権大会
- JPDGA日本選手権ディスクゴルフトーナメント
- JPDGA日本オープンディスクゴルフトーナメント
- JPDGA各地区オープンディスクゴルフトーナメント



※日本ディスクゴルフ協会(JPDGA)とは、大会参加資格の相互乗り入れなどの協力関係にあります。

Freestyle

フリースタイル

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか / 2014.8.22-8.24



競技映像

フリースタイルは、フライングディスクを用いる新体操のような演技種目です。1枚または複数のディスクを使用し、規定時間内で音楽に合わせてスロー・キャッチ、チッピングを中心としたテクニックを駆使して演技を行います。「完成度」「難易度」「芸術性」の項目で審判が採点をし、順位を決定します。通常は2~3人で演技を行うチーム部門で競われます。フライングディスク競技の中でも最も華やかで魅力のある種目です。

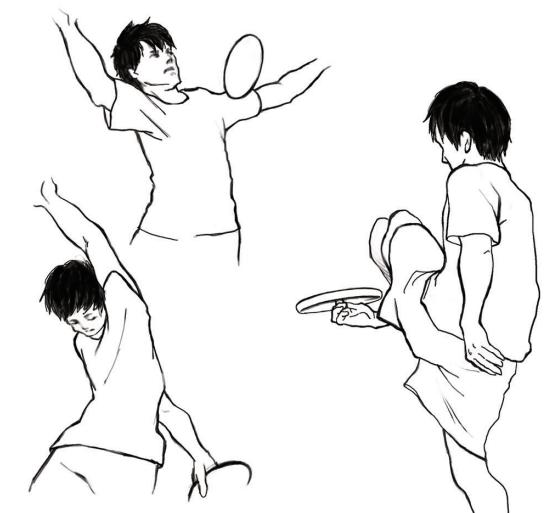
ネイルディレイは、回転しているディスクを爪の上で操るフリースタイルの基本技です。反時計回りのカウンター・クロックワיז、時計回りのクロックワизでディスクを回します。

ボディーロールは、大きく広げた両手の端から端までディスクを転がす技です。ネイルディレイをした後に、リムディレイ（ディスクのふちに爪を掛けて回転させる）へ移行し、ディスクを転がすのが一般的です。上級者になると、端まで転がったディスクをもう一度空中に浮かせ、胸や背中を使って連続してボディーロールすることも可能です。

スロー・キャッチ、チッピングも基本技のひとつです。自分または相手の得意な回転方向でディスクを投げ、技を開始します。この時、回転数を上げることと、技を始めやすい位置に投げることを意識することで技を長時間持続させることができます。キャッチも重要な要素であり、ガイディスキキャッチなどのダイナミックなキャッチは観客を魅了します。

主な世界大会
世界オーバーオール選手権大会

主な国内大会
全日本フライングディスク個人総合選手権大会



Double Disc Court



ダブル・ディスク・コート

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか / 2014.8.22-8.24



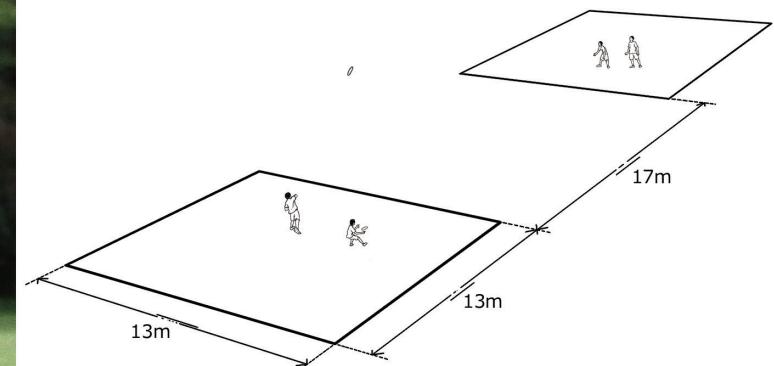
競技映像

ダブル・ディスク・コートは、2人1組の2チームが17mの間隔をあけた13m四方のコートに分かれてプレーします。2枚のディスクを相手コートに投げ合い、相手チームに2枚のディスクを同時に触れさせるようにする競技です。

両チームの1人がディスクを1枚ずつ持ち、合図で同時に相手コートにディスクを投げてゲームを開始します。相手がキャッチできずに相手コート内にディスクが止まる、もしくは相手の投げたディスクがアウト・オブ・バウンズに出た場合は1点を獲得します。相手が2枚のディスクを同時に触れた場合は2点(ダブル)を獲得します。21点または15点先取の得点制で勝敗を決定します。風を読み、ディスクが地面に着地した後の軌道まで計算に入れる正確なスロー技術とダブルを防ぐ技術、2人の動きを合わせるチームワークが求められる種目です。

主な世界大会
世界オーバーオール選手権大会

主な国内大会
全日本フライングディスク個人総合選手権大会



Discathon

ディスカソン

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか / 2014.8.22-8.24



競技映像



ディスカソンは、約1キロのコースを2枚のディスクを交互に投げて進み、スタートからゴールまでのタイムを競う種目です。

プレーヤーは2枚または予備を加え3枚のディスクを使用し、林間コースの途中に設けた数十ヶ所のディスク通過を義務づけた旗門（マンダトリー）にディスクを通過させながら進みます。

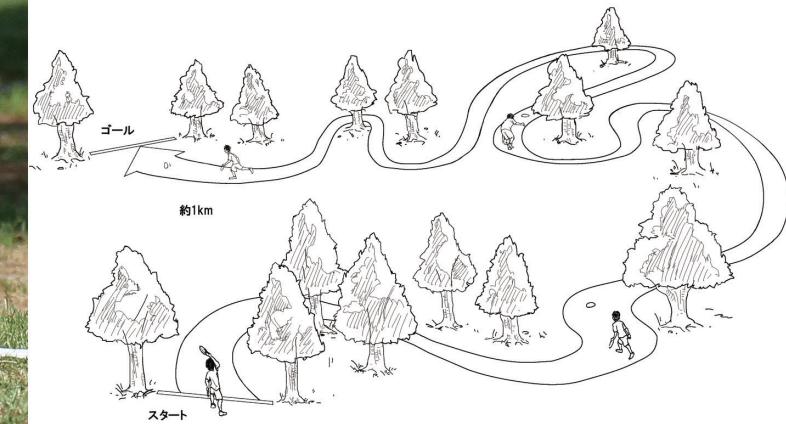
スタートライン手前から1枚のディスクを投げて出発し、ディスクの落ちた地点まで残りのディスクを持って走ります。落ちたディスクの中心から1.5m以内のライエリアに到達したら、持っているディスクを投げ、投げ終えてから落ちているディスクを拾って前に進みます。

コースには数ヵ所のテスト（標的）を設置し、規定ラインの手前からスローをしてクリアできれば通常のコースよりも短いコースを進むことができます。約1kmを走り、最後に用意されたフィニッシュラインをディスクが通過すればゴールとなります。

地形や風に合わせて的確な位置にディスクを投げる技術と、起伏のあるコースを走りきりる体力、体力を消耗してもディスクを正確に投げ続ける精神力が求められます。

主な世界大会
世界オーバーオール選手権大会

主な国内大会
全日本フライングディスク個人総合選手権大会



Distance

ディスタンス

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか / 2014.8.22-8.24

競技映像



ディスタンスは、ディスクの飛距離を競う競技です。間隔をおいて設けた複数のスローイングサイトから2分30秒以内に5回スローを行い、飛距離を計測します（ファウルラインの中心から、地面に落ちた地点でのディスクの中心までを計測）。スローイングの際は、投げ方に制限はありませんが、バックハンドスローが一般的です。

現在の世界記録は、2014年10月25日にアメリカのネバダ州プリムで開催された「Fall Desert Wind Open Distance event」にてドイツのSimon Lizotte選手が記録した「263.2 m」です。また、現在の日本記録は、2009年12月31日に山口県山口市で開催された「日本テレビズームイン・チャレンジディスタンス大会」にて大内勝利選手が記録した「178.03m」です。

ディスタンスの記録は年齢区別に扱われ、男性75歳以上の日本記録は77.00m（高野貞雄 / 2013）、男性1歳以下の日本記録は11.15m（大島真 / 1989）です。女性の日本記録は、2010年に福島県南相馬市で開催された第22回日本選手権ディスクゴルフトーナメント記録会にて野中麻由選手が記録した「134.96m」で、最年長記録は藤本俊選手が101歳の時に打ち出した（7.86m / 2005）です。

飛距離を競うこの種目の特性上、様々な形で記録が残っており、車いすディスタンスの記録は51.00m（金田典子 / 2003）、室内でで計測を行うインドアディスタンスの記録は84.14m（大滝陽平 / 2001 / 12歳）、ディスクが着地した瞬間ではなく転がった後に静止した地点までの距離を計測するローラーディスタンスの記録は206.00m（大島寛 / 2008）、フリスピーパイ皿ディスタンスの記録は、58.65m（大島寛 / 2013）となっています。

世界記録（男子）：263.20m (Simon Lizotte:Germany / 2014)

世界記録（女子）：162.00m (Niloofar Mosavar Rahmani:Sweden / 2010)

日本記録（男子）：178.03m（大内勝利 / 2009）

日本記録（女子）：134.96m（野中麻由 / 2010）

主な世界大会
世界オーバーオール選手権大会

主な国内大会
全日本フライングディスク個人総合選手権大会



Accuracy

アキュラシー

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか / 2014.8.22-8.24



競技映像

アキュラシーは、ディスクコントロールの正確さを競う種目です。高さ1mの足をつけた、一辺1.5mの正方形の枠をゴールとし、正面13.5m・22.5m・31.5m、左右方向13.5m・22.5mの7ヶ所から各4投します。7分間の競技時間に合計28投を行い、ゴールの通過数を競います。

現在の世界記録は、1991年12月14日にアメリカのネバダ州ラスベガスでアメリカのMike Cloyes選手が記録した「25投」です。また、現在の日本記録は、「19投」で、2003年にアメリカカリフォルニア州サンタクラーズで開催された「世界個人総合選手権大会」にて小松由香里選手が、2009年に茨城県ひたちなか市で開催された「第29回全日本フライングディスク個人総合選手権大会」にて大内勝利選手が、2010年に愛知県愛西市で開催された「第35回全日本フライングディスク個人総合選手権大会」にて大島寛選手がそれぞれ樹立しています。

アキュラシーの記録は年齢区分別に扱われ、男性65歳以上の日本記録は12投（高野貞雄 / 2004 / 70歳）、男性5歳以下の日本記録は3投（実広朝陽 / 2009）です。女性の日本記録は、上記に記載している19投（小松由香里 / 2003）で、最年少記録は白石萌選手が2007年に8歳で打ち出した「3投」、最年長記録は早川敬子選手が2007年に70歳で打ち出した「3投」で、早川選手の記録は世界記録としても認定されています。

世界記録（男子）：25投（Mike Cloyes:USA / 1991）

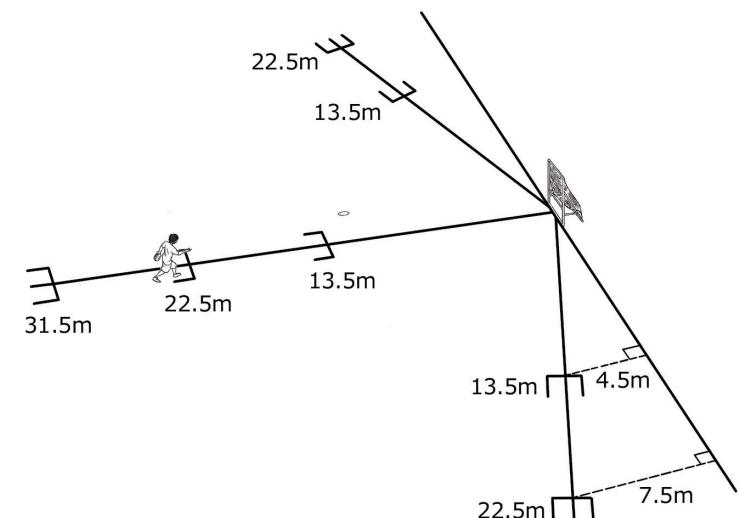
世界記録（女子）：19投（Yukari Komatsu:Japan / 2003）

日本記録（男子）：19投（大内勝利 / 2004）（大島寛 / 2010）

日本記録（女子）：19投（小松由香里 / 2003）

主な世界大会
世界オーバーオール選手権大会

主な国内大会
全日本フライングディスク個人総合選手権大会



Self Caught Flight

Maximum Time Aloft [MTA] / Throw Run and Catch [TRC]

セルフ・コート・フライト

マキシマム・タイム・アロフト / スロー・ラン・アンド・キャッチ

写真：第39回全日本フライングディスク個人総合選手権大会 / 茨城・ひたちなか / 2014.8.22-8.24



競技映像



セルフ・コート・フライト [SCF] (Self Caught Flight) は、マキシマム・タイム・アロフト [MTA] (Maximum Time Aloft) とスロー・ラン・アンド・キャッチ [TRC] (Throw Run and Catch) の複合の競技です。

SCFは、MTAとTRCのスコアを組み合わせた総合スコアで競われます。算出方法： $SCF_Score = (5.5 \times MTA_Score) + TRC_Score$ (MTA_Scoreの単位は[秒]、TRC_Scoreの単位は[m]で、小数点以下は2桁になるように四捨五入する)

現在までのSCFにおける世界記録は、1996年7月16日にスウェーデンのウプサラ市で同国のNiclas Bergehamn選手が記録した「166.19(14.63秒 / 85.72m)」です。また、現在の日本記録は、1988年7月20日にアメリカのカリフォルニア州で開催された「1988 WFDF World Championships」にて大島寛選手が記録した「152.425 (10.87秒 / 92.64m)」で、女性の日本記録は、1991年に羽深陽子選手が記録した「94.615 (7.87秒 / 51.33m)」です。

マキシマム・タイム・アロフト [MTA] (Maximum Time Aloft)

ディスクを投げてから、キャッチするまでの滞空時間の長さを競う競技です。プレーヤーがディスクをリリースした瞬間からキャッチするまでのタイムを、3人の計測係が計測し、3つの記録のうち中間の記録を採用します。その際、プレーヤーはディスクを身体の2ヶ所同時に触れることなく、片手でキャッチしなければなりません。各ラウンドで5回スローし、最長タイムがスコアとなります。

世界記録（男子）：16.72秒 (Don Cain:USA / 1984)

世界記録（女子）：11.81秒 (Amy Bekken:USA / 1984)

日本記録（男子）：15.30秒 (大島寛 / 1992)

日本記録（女子）：10.69秒 (酒井唯加 / 1998)

スロー・ラン・アンド・キャッチ [TRC] (Throw Run and Catch)

直径4mのスローイングサークルの中からディスクを投げ、自ら走つてそのディスクを片手でキャッチした地点までの距離を計測します。各ラウンドで5回ずつスローし、最長距離がスコアとなります。

世界記録（男子）：94.00m (Christian Sandstrom:Sweden / 2003)

世界記録（女子）：60.02m (Judy Horowitz:USA / 2003)

日本記録（男子）：92.64m (大島寛 / 1988)

日本記録（女子）：51.33m (羽深陽子 / 1991)

主な世界大会
世界オーパー・オール選手権大会

主な国内大会
全日本フライングディスク個人総合選手権大会

Beach Ultimate



ビーチアルティメット

写真：2015年A&WORLD世界ビーチアルティメット選手権大会（アラブ首長国連邦・ドバイ）/ 2015.3.8-9

ビーチアルティメットは、砂の上でアルティメットを行う5人制のチームスポーツです。通常のアルティメットより少し小さい75m×25mのフィールドでプレーを行い、フライングディスクを落とさずにパスをして運び、コート両端のエンドゾーン内でディスクをキャッチすれば得点となるスポーツです。

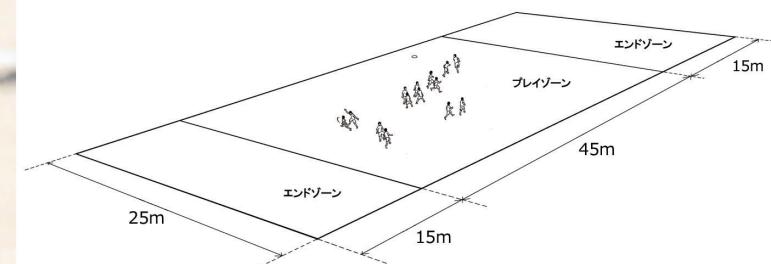
世界大会などのトップレベルの試合では、不安定な足場でも正確にパスを繋ぐディスクコントロール、浜風に乗るディスクの軌道を正確に読み切る把握能力、そして砂の上で走り続ける走力など、芝の上でのアルティメットと同様、もしくはそれ以上の技術が求められます。

一方、砂の上では走力に差がつきにくく、大人から子供まで一緒になってプレーを楽しめるのもビーチアルティメットの特徴です。夏の海やビーチといった開放感のあるロケーションも相まって、多世代で一緒に身体を動かすことを楽しめる種目です。

初の世界ビーチアルティメット選手権大会は、2004年にポルトガルにて開催され、2015年3月にアラブ首長国連邦・ドバイで開催された大会が第4回大会となりました。

通常のアルティメット同様、オープン／ウィメン／ミックス／オープンマスターズ／ウィメンマスターズ／ミックスマスターズ／グラウンドマスターズの7部門が設けられています。

主な世界大会
世界ビーチアルティメット選手権大会



Dodgebee

ドッヂビー

日本フライングディスク協会 独自公認種目

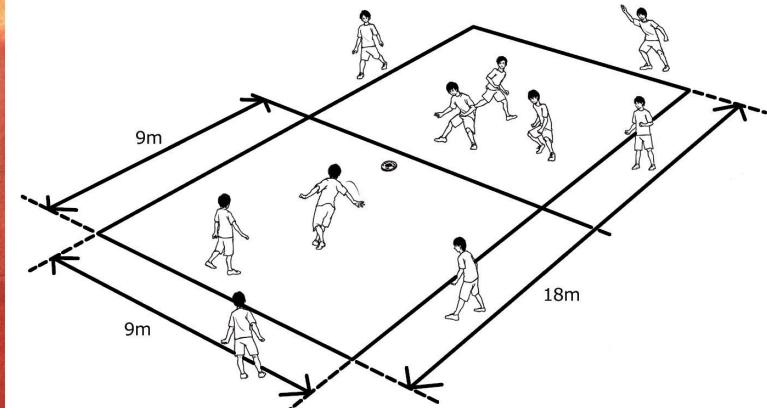


JFDA公認ソフトディスク種目「ドッヂビー」は、9m×18mのコート（バレーボールコートの大きさ）で、ソフトディスクを使用して1チーム13人で行うドッジボール形式のゲームです。

相手チームにディスクを当てられたプレーヤーは外野に出なければならず、相手チームにディスクを当てた外野のプレーヤーは内野に入ることができます。決められた時間内に、相手チームよりも多くのプレーヤーが内野に残っていたチームが勝ちとなります。

尚、ドッジボールと区別するため、「ドッジビー」ではなく「ドッヂビー」を種目名称としています。

ソフトディスクを使用するため怪我が少ない一方で、短時間で運動量を確保できる種目であるため、日本中の小学校で授業やレーションの教材として取り入れられています。



※JFDAが主催した全日本ドッヂビー選手権大会や都道府県フライングディスク協会の普及活動などをきっかけに誕生した日本ドッヂビー協会とは協力関係にあります。

フライングディスクの現状

世界フライングディスク連盟 (WFDF: World Flying Disc Federation)

会長：ロバート・ラウ (Robert Rauch) (アメリカ)

専務理事：フォルカー・ベルナルディ (Volker Bernardi) (ドイツ)

事務局長：トーマス・グリスバム (Thomas Griesbaum) (ドイツ)

事務局：Neckarstrasse 11, 55296 Harxheim, Germany

Tel(+49)6138 9020 868 Fax.(+49)6138 9020 869

E-Mail: Volker.Bernardi@wfd.org ホームページ: <http://www.wfdf.org/>

世界フライングディスク連盟 (WFDF) は、1967年にフリスビーの製造元WHAM-O社の副社長であったエド・ヘドリックによって創立された国際フリスビー協会 (IFA:International Frisbee Association) がその前身です。IFAは、初代会長エド・ヘドリック、2代目会長ダン・ロディックによって運営され、8万人収容の大スタジアム「ローズボウル」での世界選手権大会の開催、雑誌「Frisbee World」の創刊などで、フライングディスク・スポーツの世界各国への普及に成功し、71カ国に約12万人の会員を持つまでに発展しました。しかし、Kransco社がWHAM-O社を買収したことにより、IFAは解散に追い込まれたため、1984年にスウェーデンに世界各国代表が集まり、商標名である「Frisbee」を廃し、どのディスクメーカーからも独立した新しい世界組織「世界フライングディスク連盟 (WFDF)」を組織し、最初の本部をスウェーデンに置くことを決定しました。初代会長は、チャーリー・ミード (イギリス)、2代目会長はダン・ロディック (アメリカ)、3代目ロバート・ラウ (アメリカ)、4代目ビル・ライト (アメリカ)、5代目ユハ・ヤロバラ (フィンランド)、6代目ジョナサン・ポット (オーストラリア)、現在はロバート・ラウ (アメリカ) が7代目会長を務めています。

世界フライングディスク連盟 (WFDF) には、2015年8月現在、62の国・地域と2つの種目団体 (PDGA-ディスクゴルフ、FPA-フリースタイル) が加盟しています。1995年にWFDFは、師岡文男理事の働きかけにより4大陸40カ国以上に普及しているスポーツの国際組織のみが加盟できる世界最大の国際スポーツ関係団体連合組織「国際スポーツ団体連合 (SportAccord : 本部スイス)」とIOCが後援する4年に1度の非オリンピック種目の国際総合スポーツ大会「ワールドゲームズ」の主催者「国際ワールドゲームズ協会 (IWGA:International World Games Association : 本部スイス)」に正式加盟を果たしました。

余談になりますが、SportAccord総会でのWFDFの席はアルファベット順でFIFA (国際サッカー連盟) の隣であり、文字通り国際スポーツ団体として認知されています。

2001年8月開催の第6回ワールドゲームズ秋田大会から、フライングディスクは正式競技となり、IOC副会長やスポーツディレクターの視察を受け高い評価を得た他、競技の模様は日本のNHKをはじめ133カ国で放送され、全国紙やスポーツ雑誌に大きく取り上げられました。

世界フライングディスク連盟は、フライングディスク11種目の国際統括組織であり、国際ルールの制定、世界記録の公認、世界選手権大会の開催（ディスクゴルフ、個人総合、国別代表アルティメット&ガッツ、クラブチームアルティメット、ビーチアルティメット）、ワールドゲームズでの運営主管、地域大会の後援、ホームページやFacebookによるインフォメーション・サービス、年次総会・理事会開催などの事業を行っています。2015年8月よりWFDFはIOC承認団体の地位を得ております、2024年のオリンピック種目入りを目指すことを決定しています。

2015年10月現在
44都道府県(山梨・石川・新潟を除く全都道府県)



一般社団法人 日本フライングディスク協会 公式ガイドブック

発行 2015年10月

発行元 一般社団法人日本フライングディスク協会

住所 〒144-0033 東京都大田区東糀谷6-4-8

電話番号 03-6423-6801 FAX 03-4335-2381 Mail info@jfda.or.jp

WEBページ <http://www.jfda.or.jp/> (日本フライングディスク協会)

<http://www.japanultimate.jp/> (JFDAアルティメット委員会)

Facebook <https://www.facebook.com/JapanFlyingDiscAssociation> (日本フライングディスク協会)

<https://www.facebook.com/JapanUltimate> (JFDAアルティメット委員会)

Twitter <https://twitter.com/JapanUltimate> (JFDAアルティメット委員会)

イラスト 高木 彩